

- ④ パンフ2回発行 (4月) 藤田祐幸講演会報告集
(6月) 広河隆一講演会報告集
(松岡さんの分については通信1号に掲載)
- ⑤ 資料集1回発行 (3月) 美浜原発事故緊急報告
- ⑥ 運営委員会2回開催 (8月、1月)
- ⑦ パネル2種類制作 松岡さんが持ってこられた事故直後の写真パネルと広河さんの核の大地より作成したもの。
- ⑧ その他、コーヒーの物販

2、現在までの会員数と募金及びカンパの総額

- ① 名簿総数約380名、内会員数は約310名。その他、九州の会員には入ってはいませんが各地で多くの方々が、支援運動を支えています。
- ② 募金総額約630万円(旅費カンパを含む)、別紙参照。(この一カ月で約40万円、コーヒーの売り上げを合わせると70万円近くの募金がありました。)

3、支援物資のリスト(別紙参照)

4、現地調査報告・概略

① 日程

- 6月13日 東京ーモスクワーキエフ (宿泊キエフ・ホテルドニプル)
- 14日 ジトミール市/子供総合病院・チェルノブイリ同盟(ジトミール)
- 15日 /保健局・コロステン・ナロジチ地区
- 16日 /午前中観光・避難民の家訪問
- 17日 /州新聞の編集長懇談・がんセンター・サナトリウム
- 18日 ミンスクへ移動(白ロシア共和国)・チェルノブイリ同盟と会見
- 19日 /モギリョフ(保健局)・スラブゴールド村、往復520キロの旅
- 20日 /放射線医学センター付属病院・平和基金と懇談、モスクワへ
- 21日 モスクワ(市内観光)ー東京へ出発
- 22日 東京ー福岡

② 支援物資

ピースニック新聞社	FAX 1台、コーヒー20個、焼酎
" 移住基金	<10万円のカンパ>
子供総合病院	真空採血管・針1800本、粉ミルク64缶
コロステン中央病院	医薬品・おもちゃ類・粉ミルク64缶
ナロジチ中央診療所	放射能測定器・おもちゃ類
がんセンター	心電計2台
サナトリウム	おもちゃ類
チェルノブイリ同盟（白ロシア）	放射能測定器・焼酎<6万円のカンパ>
ソビエト平和財団白ロシア支部	ポケット線量計1個

③ 汚染状況（空間線量）

ジトミール市（空間線量0・015以内）	平均で0・3～0・4μsv/時
コロステン地区	1・2μsv/時 平均で0・4～0・6μsv/時
ナロジチ地区	1・6μsv/時 平均で0・6～1μsv/時
30キロゲート	0・7μsv/時
ミンスク	平均で0・4μsv/時
モギリョフ	バスの中で0・6μsv/時 "
スラブゴルド	" 最高10μsv/時 平均で1～2μsv/時
モスクワ	0・2～0・3μsv/時

④ 体内汚染

人工的な除染や降雨などにより空間線量はかなり減っていた。しかし、それは放射能が無くなったことを意味するのではなく、放射能の移動を意味している。土の中、地下水の中、別の場所へと移動している。地理的条件を考えれば水はかなり危険な状態。

政府は汚染地区（15キュリー以上）で採れた作物は食べてはいけないといっているが、きれいな食べ物は村にはきていない。白ロシアでは、きれいな地域に住んでいる人が汚染されたものを食べ、汚染地に住んでいる人たちはきれいなものを食べるといいます。しかし、白ロシアでも村では同じだった。汚染していると分かっても食べるしかないし、飲むしかない。

⑤ 調査団の累積被曝量

8日間で2.2μsv～1.6μsv。

⑥ 医療の現状

- 首都と地方の格差。
- 医療のレベルはそれほど変わらないが、機材、薬がほとんどない。
- 完全な治療をしたくてもできない。
- 100万本の注射機よりも医療機器が欲しい。

⑦ 現地の救援運動について

- 政府に対する要求行動
- 政府・地方ソビエトに力がないことを知っているので独自のプランを持っている
例えば、ピースニックのようにチャリティー基金を作り、移住の家を買って汚染地に住んでいる人に与える。チェルノブイリ同盟ジトミール支部は協同組合を作り、子供たちをサナトリウム（外国も含む）へ行かせる資金を調達するというチェルノブイリ同盟白ロシアでは、自分たちで広大な敷地にサナトリウムを建設する。また、日本との合資会社も計画している。遺伝学（放射線による遺伝病）を研究する施設。
- チェルノブイリの災害を乗り切るために、様々な模索をしている。そのたくましさで圧倒される。
- 私たち（日本）に対する期待の大きさを痛感した。

5、支援運動・九州 2年目の課題

① 組織と運営

1. 会員制について（会員資格の有無と会費）

現状通り、年会費1000円で期間は1年。（7月から来年6月まで）今年度の会費を未納の方は、会費の納入をお願いします。尚、会費は会の運営費に当てられます。

2. 各地連絡窓口と運営委員会のあり方

新たな窓口を追加しています。運営委員会については現実的に九州各地から会議のために集まってくるというのは無理があるので、事務局に一任してもらい、緊急を要する場合には電話などで連絡をとるということになりました。

3. 事務局体制と機能、運営について

現状の通りです。

② 2年目の課題（現地調査報告を元に）

1. 支援物資、本当に必要としているものを送る。
医療機器としては、血液分析機、自動血球測定器、超音波診断機など。
医薬品では、制癌剤や総合ビタミン剤
2. 医療交流を進める。窓口はチェルノブイリ同盟白ロシア、日本からの体制を整える。九州での受け入れも含め。
3. 年に一度ぐらいの調査の必要性。高レベル汚染地で生活している人たちの追跡調査の必要性を感じた。今度は九州に招待してはどうか。
4. その他

③ 当面の活動

1. 各地で報告会を開催する。すでに終わったところ、今後の予定です。
6/30別府市、7/7熊本市、7/9北九州市、別府市、7/10別府市（河野自宅）、7/12大分市、7/13日出、7/15佐賀市、7/21佐世保市
7/29唐津市、8/3大分市、8/5玖珠郡、8/9宮崎市、8/10鹿児島市、大分市、8/27大分市、8/29福岡市、9/4国東、9/6別府、9/7宗像市、9/8えひめ（チェルノブイリ救援・えひめ）の予定です。
2. 資料としてスライドを3組制作。深江、田宮、河野がそれぞれ保管し報告会などで使用する。
3. 報告集（70～80頁）、8月末発行予定です。是非ご一読下さい。

◇ ◇

ということで、「2年目の支援運動」の課題を確認しました。チェルノブイリ現地では白血病や甲状腺癌などが潜伏期間を過ぎ、今後急激に発生するかもしれないという状況にあり、それらの病気を早期に発見するための医療機器の整備が急がれます。汚染地区では移住もままならず、子供たちのことを気遣いながらもそこで生活を続けなければならないという厳しい状況にあります。医療の現状は、共和国の首都と地方都市、さらには地区レベルでは大きな格差があります。そうした地方都市、地区レベルの病院に医療機器や薬を早急に送りたいと思います。具体的には①血液分析機（約200万円）、②自動血球測定器（90万円）、③待運びの出来るポータブル・エコー（360万円）、④医薬品を1セットにして送りたいと思います。また、血液分析機には分析に使う試薬の補充を定期的に行なう必要があります。この作業が結構大変だということです。何か所に送ることが出来るか私たちの力量にかかっていますが、でき

るだけ多くの地域に送りたいと思っています。また今回の調査で、定期的な交流の必要性を感じました。ジトミール州の人々は、日本からの支援に非常に感謝し、また、勇気づけられていることがわかりました。街角で私たちを見つけ、『一言お礼が言いたくて』とわざわざ駆け寄ってきた人がいたりして、こちらが感激です。お互いの顔が見え、お互いを理解することでより息の長い交流が続くと思います。そのことも含め、今度はこちらが招待しなければなりません。その前にもう一度、第二次調査団の派遣がありそうです。そうです。これらの医療機器をもって秋ぐらいにでも第二次調査団の派遣を考えています。次回の調査の目的は、汚染地区の生活の実態を詳しく調べることです。今回、医療調査が目的だったため、汚染地区に暮らす人々の話を十分聞く時間が取れませんでした。しかし、スラブゴールドのような町（詳しくは河野さんの報告参照）はいくらでもあるというのが私たちの感触です。『この町に残ってもっと調べてみたい。町の人たちと話がしたい。』というのが調査団の一致した意見でした。その任務を第二次に託するというわけです。

第三次募金活動に向けた「趣意書」を近日中に作成し、郵送しますのでご活用ください。

水俣とチェルノブイリイベント

佐世保市の市民平和グループ・ピース・デイズ・イン・さばは実行委員会（池上 祥子委員長）は今月から来月にかけて、

被害の恐ろしさ訴え

ソ連・チェルノブイリ原発の事故と水俣病の被害の恐ろしさを訴えるイベントを行います。六月にチェルノブイリ周辺を医療協力調査に訪れた「チェルノブイリ支援運動・九州」（事務局・北九州市）の代表の「生の報告」があり注目される。十四日午後一時からは佐

あすから佐世保市で

世保市光月町「チェルノブイリ展」。水俣病患者を撮影し続けたアメリカ人のW・ユージン・スミス夫妻の写真四十点や、チェルノブイリの被ばく者ビデオ上映と水俣病患者の証言。二徳氏の講演。二十一日午後一時からは回所では「チェルノブイリを考える会」。「支援運動・九州」代表の深江守氏が、放射能で高濃度に汚染された地域について話す。いずれも入場無料。

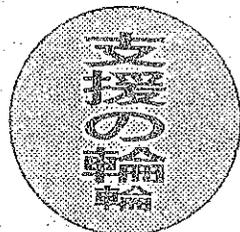


「水俣病とチェルノブイリ」の展示の様子。会場は佐世保市光月町。

写真展や講演会

市内の主婦らを中心に発足。毎夏、差別問題や戦争問題などを考えるイベントを開催してきた。富野山美子事務局長は「国や企業の論理を優先させて公害を隠し、住民の被害を増大させている」と指摘。水俣もチェルノブイリも同じ。一人でも多くの人に気づいてほしい。

6月20日、ミンスクにある放射線医学研究所付属病院を訪問し、内分泌部長のストラボミル・ヒイネリッチさんにお話を伺いました。この病院は、白ロシア共和国の甲状腺疾患に関するセンターになっており、1989年1月に病院としてスタートしています。当然、超音波診断装置を使用しているのですが、日本から輸入したアロカの超音波診断装置の部品（センサー部分でのどに当てて甲状腺癌などを発見する）がなくてせつかくのエコーが使えずに困っているとのことで、できれば私たちになんとかしてほしいという事でした。そこで帰国後アロカに「部品が付いていなかったそうだが」と問い合わせたところ、その製品はソ連政府がソ連の輸入業者を通して購入したもので、部品の紛失についてアロカとしては責任は負いかねる、という返事でした。ちょうど私たちの帰国と同じ頃、医学研究所から広島へ5人研修に行くことになっているので帰りにでも渡してほしい、という所まで話が話まっていたこともあり、「支援運動・九州」から贈呈することにしました。また、ミンスクの小児血液病センターには、伊勢先生経由でみどり十字株式会社からのカンパとして110万円相当の薬品を贈呈しています。

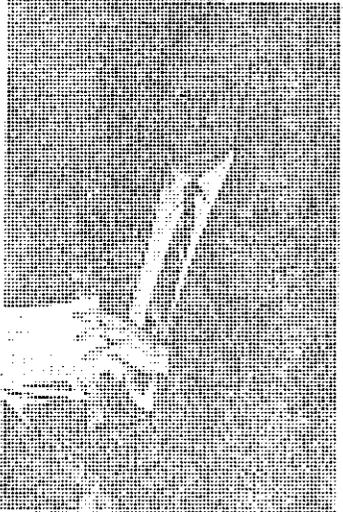


ソ連・チェルノブイリ原発事故の被ばく治療研修の

がん発見に検査装置を

「支援運動・九州」来日の医師に贈る

ため広島市を訪れている白ロシア放射線医学調査研究所のアレクサンドル・アリンチン医師（左）ら五人に十九日、九州の脱原発運動家らで作っている「チェルノブイリ支援運動・九州」（深江守事務局長）から日本製の超音波診断装置の部品がプレゼントされた。



贈られた超音波診断装置の部品を手にするアリンチン医師
19日夕、広島市内の日赤広島県支部で

この部品は診断装置のセンサー（探触子）で、のどに当てて甲状腺がんなどを発見するのに使う。価格を九十万円。五人の医師は十九日で約三週間にあたる研修を終え、この日午後四時から広島市中区の日赤広島県支部でさよなら会見をした。アリンチン医師は、「非常に感謝している。持ち帰って早速、使いたい」と話していた。

研究所は白ロシア共和国の首都ミンスクの近くにあり、被ばく治療の中心的施設。「支援運動・九州」がこの六月、市民レベルでできる被ばく者救済のありかたを調べに訪り、甲状腺がん用センサーがなくて困っていることがわかった。

アリンチンさんは、朝日新聞厚生文化事業団と日本赤十字社などが行っている被災者救済募金活動「チェルノブイリに光を」の招きで二日、他の医師も被災児輩らとともに来日した。

「支援運動・九州」では今後も医療機器を贈るため募金活動を続ける。連絡先は北九州市小倉南区徳吉東一の一三の二四の深江守さん。電話〇九三・四三二一〇六六五。

「チェルノブイリ汚染地を訪ねて」

河野近子

成田を飛び立ったアエロフロート機が、9時間あまりの順調な飛行を終え、モスクワ上空に達し高度を下げるに従い、初めて見るソ連の地が私の目の下に大きく広がった。これから訪れるはずのその地は、見渡す限り平地が続き、その大部分は深緑の美しい森でおおわれている。その一部が畑として切り開かれたり、草地として（放牧の為なのだろうか……）広がっていて、人々がその地に生活を営んでいることがうかがえる。所々に小さな村が点在していて、民家のいくつかが固まっている。あの家の一つひとつに人々が暮らしているのだと思うと、何故とはなくなつかしさを覚えた。

着陸寸前、モスクワ近郊の村の上空に達した時、湿地帯でもあったのか、緑の森の中に大小数知れない程の湖が点在して、何とも云えず美しい風景が眼下に展開し、息を飲む思いだった。そしてかわいい色と形をした家々は、それぞれの敷地一杯を木々で埋め尽くし、あふれる緑にうずまって並んでいた。私はその光景をながめながら、まるでメルヘンの世界に迷い込んだような錯覚をさえ起こしそうな気分させられていた。これから訪れる地が放射能で強く汚染されている等ということが、まるで信じられないような美しい光景だった。

現地時間の夕方5時前モスクワ空港に降り立ちまず感じたことが、建物の中が暗いということ。日本の明るさに慣れて

しまっていた目には、何とも異常な程の暗さだった。そして全体の雰囲気も静かなのである。人も少ないし、日本の建物の中のけげげしさに比べ、総てがとに角静かなのだ。日本のにぎやかさに毒されきった目には、薄気味の悪ささえ感じられる程の暗さと静けさだった。その場の空気全体が沈滞しているような、おかしな感覚に襲われる。そんな、少し不安をさえ覚える程の静かな空気の中で入国手続きを済ませ、ダンボール箱45個の山程の支援物資をそれぞれの手押し車に分けて、前が見えない程高く積み上げたそれを押しながら建物の外へ。「さあ、ソ連の第一歩！！」という思いで、キエフへ向かう為の国内線の空港まで私達と荷物を送り届けてくれるはずのバスへと乗り込んだ。

こうして始まった、成田空港に無事着陸するまでの10日間の私達の旅は、国民性の違いや意志の疎通が充分できていなかったことによる悪意の無い行き違い等で、目的が100%達成できなかったとは云うものの、医療調査と相互の連帯を深める為の交流はまずまず成功したのではないかと思っている。行く先々で、人々は素朴さとおおらかさを一杯にあふれさせ、私達を心から歓迎してくれた。ウクライナ共和国の5日間ずっと何から何まで私達の面倒をみてくれたジトミールスキー・ヴィースニック（週刊発行の小さな新聞社）の人達は、私達が国内線に乗りかえやっとの思いで到着したキエフ空港に、夜中にもかかわらずこやかに出迎えてくれた。飛行機の遅れの為、何とそこに4時間も待つてくれたのだという。迎いの車にダンボール箱の総

てを積み込み、長い1日の予定を終えて
キエフ市内のホテルへと夜中の道を走っ
た。静かなキエフの夜、時差による長い
長い1日の旅となった疲れの為か、すぐ
に眠りについた。(笑を云うと、私はよ
ほどのことがない限り、いつでもどこで
もすぐに眠れるという特技の持ち主なの
だ。)

翌朝窓の外に舞う春の雪(ソ連名物の
ポプラの綿毛だった)に驚かされた私達
は、朝食後、キエフから140km離れた
ジトミール市へと向かった。この道がど
に角すごい。140kmの間、全く山も谷
も無い。森と草原と畑ばかりが延々と続
く中を一直線に延びている。たった一ヶ
所ゆるやかなカーブがあったが、それを
除けばただひたすら一直線!! 何とも
すごい。日本とのスケールの違いを見せ
つけられる思いだった。この一直線の道
を車は110kmものスピードで突っ走る。
しかしこの道は決して高速道路ではない。
舗装もあまり上等とは云えない、ごくご
く普通の道だ。時々人がわたり、自転
車が走っていたりする(とは云っても
車の絶対数が少ない為、日本の道よう
な混雑ぶりとは全く違い、至ってのどか
な田舎道ではあるのだけれど)。道の両
側には“ルピン”という名の薄紫の花が
至る処に群生していて、今を盛りと咲き
乱れていた。(後日松下竜一さんから、
日本名で“ルピナス”という花で日本に
もあると教えてもらった)時折通り過ぎ
る村の家々は何処ものどかを絵に描いた
ような様子で、あひるが遊んでいたり、
牛が草を食んでいたりする。森や草原は
何処も緑にあふれ、人々が大自然の豊か
さの中に育まれて今日まで生かされてき

た様子が一目で納得される。豊かな穀倉
地帯という表現がピッタリの光景だった。
あまりに美しい自然だけに、この地に放
射能が降り注ぎ、この豊かな自然を広範
囲に汚染し尽くしてしまった取り返し
のつかない現実、他国のこととは云え、
云いようのない憤りと哀しさを覚え
ずにはいられなかった。全く何という事
だろう。これ程に美しい土地が、一瞬に
して放射能まみれの恐怖の土地へと変
わってしまったのだ。

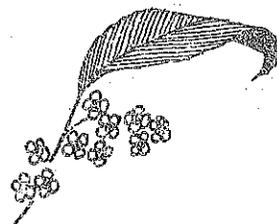
放射能によって一平方キロメートル当
たり一キュリー以上汚染されてしまっ
た土地は、ウクライナ共和国(チェルノ
ブイリ原発をかかえた国)、白ロシア共
和国(事故時の風向きの為、全放出量の7
0%をかぶってしまった国)、ロシア共
和国の三つの国にまたがって広がって
いる。その面積は、なんと245万ヘクタ
ールにも及ぶという。あまりに広すぎて、
直感的にはピンとこない。そこでこの地
図に日本列島を重ね合わせてみるとよく
解る。なんと本州がスッポリと収まって
しまうのだ。青森県から山口県までが汚
染地の中に入ってしまう。これだけの広
大な地域が放射能まみれにされてしまっ
たという。そして、この汚染地域に済む
人の数は482万人だという事だ。その
内、15キュリー以上の地域を移住対象
地域に決めたそうだが(ウクライナ、白
ロシア共和国の法律)、その対象者だけ
でも200万人にもものぼるという。たっ
た一基の原発が爆発しただけで(しかも
セシウムの場合、内蔵する量の60%弱
が放出されたにすぎないという)これだ
けのバラボウな環境破壊をもたらしたの
だ。この量は、セシウムの場合広島原爆

の1500発分にも相当するのだという。そして始末の悪い事に、放射能は人の手では消す事も無毒化する事も出来ず、それぞれの寿命で減っていつてくれるのを、ただじっと待つ以外に手は無い。チェルノブイリで一番深刻な問題となっているセシウムの場合、その力が千分の一にまで減るのに、何と300年もの長い年月を要する。これ程のすさまじい放射能汚染による環境破壊をもたらす原発事故。ここソ連の地は、身をもって私達にその事を教えてくれている。

この深刻な汚染の真只中に住んでいる人々の許を訪れ、その現実をつぶさに見届ける仕事これから始まる。病院やサナトリウムを巡り、保健行政の担当官の話を聴き、ジャーナリストや科学者、市民運動家等に会い、ヴィースニク新聞社の寄付した避難民の家を訪れ、そして私の最大の目的であるこの汚染地帯に今尚住み続けている人々の許を訪れ、その生の声を聴いて来るという計画だ。まず病院やサナトリウムは、ウクライナと白ロシア合わせて8ヶ所を訪問した。都市部の放射線医学専門病院や血液病関係の専門病院、子供専門の総合病院等の大病院から、強汚染地の村の病院まで。これらの病院を訪れ、責任者の話を聴く。やはり強汚染地帯の病院は、患者数が増え、ベッドを増やしたという所が多い。だが、急増する患者を見てあげるべき医者達が、自分の子供を守る為逃げてしまって、医者が足りないという声をあちこちで聞いた。中には半数の医者が逃げてしまったという病院もあった。人情として無理もないとは思ふものの、見捨てられ、逃げる事も出来ず汚染地で病に苦しんでいる

多くの人々の事を思うと、何とも複雑な心境になる。

そんな病院で事故後増えた疾患としてあげられたものは、小児白内障、血液異常（白血球減少、ヘモグロビン減少、貧血、染色体異常……）、免疫力低下、甲状腺異常、消化器官の病気等で、めまいや集中力低下、つかれやすく感染性の病気にかかりやすい等の体力の減衰を訴える患者が目立って増えたという事だ。一部の病院では成人のガンや子供の白血病（リンパ性）が増えたとの声も聞かれた。しかし、全体的に成人のガンや小児白血病は今はまだまだ“はしり”という印象を受けた。伊勢先生によれば、事故後5年たった今は潜伏期がやっと過ぎたところで、これから本番を迎える事になろうという話であった。むしろ今の時点で気になったのは、被曝児童のうちの95%にもものぼる子供達に現れているという甲状腺肥大である。そればかりか、もうすでにその子供達の中に甲状腺ガンが確実に始めているのだ。事故前是一件もなかった子供の甲状腺ガン。これは明らかに放射能被曝によるものと云い切っている。しかも、これもまだほんのはしりという事だ。これから先、これら各種のガンや白血病がどこまで増え続けるのか…。



ある専門家は、チェルノブイリの放射能によるガンで倒れる人の数は、最終的には100万人~200万人にもものぼるであろうと予測している。この不幸な予測が大きくはずれる事を心から期待しているのだが……。今後20年、30年という長い年月の後にしか、この結論は出ない。今チェルノブイリでは壮大な人体実験が始まったばかりと云える。白ロシアのある科学者は、これは政府によるジェノサイド（大量虐殺）であると云い切っていた。しかもこの犠牲者は、細胞が瑞々しい今の子供達に集中して現れるはずなのだ。放射能によって幼児は大人の10倍、乳児や胎児は100倍という影響を受けるのだから……。

今後増え続けるであろう各種のガンや白血病という、一番深刻な病気を一刻も早く見つける為には、住人の健康診断が欠かせないのだが、今その為の検査機器が極端に不足している。ソ連は今経済危機とチェルノブイリ事故による出費が重なって、政府にはそれらの機器を揃えるだけの力が全く無いようだ。首都の大病院を除けば、総ての病院で口を揃えて、超音波診断装置（エコー）、血液分析機、血液分離機等の検査機器とその試薬が緊急にほしいと訴えていた。早期発見すれば助かるかも知れない子供達の生命が、検査機器が無い為に発見が遅れ手遅れになるという事態がすぐ先に見えている。私達に、もし何か手助けできる事があるとすれば、まず第一にこの検査機器を何とかしてあげるといふ事だと思われる。

このように放射能が生体に及ぼす影響として各種の病気があげられるが、もう

一つ忘れてならないものに、遺伝的影響がある。放射線が遺伝子を傷つけた結果起こる現象で、私達の許にも、考えられない大きさに育つ植物の話と共に、2本足、3本足、8本足の子馬、二つの顔を持つ子ブタ、そして異常な程の大きさの角膜の無い目を持つ子ブタといった、動物達の異常出産が伝えられていた。行政官やジャーナリスト等の口から聴いたところによると、この異常は今も続いているという事だ。動物達に起こる事は当然人間にも起こるはずで、様々な障害を持つ赤ちゃんが産まれていると明言する人もいた。現に私も以前、目をふさぎたくなるような痛ましい赤ちゃんの写真を何例も見つめた。また流産が増えているという声も聞かれた。胎児の障害があまりに激しい時、母体はそれを持ちこたえられず、流産するという形に終わってしまうという事だが、事故後の流産の多発の中に、胎児の障害が原因という例も多いと考えていだろう。この遺伝的影響は今後何世代にもわたって続くはずである。ジトミール州全域対象の新聞、ラジャンスカ・ジトミールシナの編集長は、この遺伝的影響が今後何世代続くのか、今は全くわからない……と話していた。

このような深刻な状況にある汚染地の住人は、一刻も早く汚染の低い土地へ移住させる必要がある。それでももうこの5年間、事故直後の決定的な被曝を含めて取り返しのつかない程の被曝をしてしまっただけなのだが。ウクライナ共和国も白ロシア共和国も、法律で15キュリー以上の汚染地に住む人は今年中に移住させるという決定をしている。しかし今のソ連の経済力では、連邦政府も共和国

政府も、現実にはその法律を施行する力は無いようだ。新しい土地に家を建て、移住先に仕事を用意し、移住の費用もまかなってあげるとなると莫大な資金が必要となるが、200万人にも及ぶ対象者をそういう形で面倒見るといふ事は実際上不可能なのであろう。現実にはほとんどの人々がいまだに汚染地に暮らしているという。

そんな深刻な現実の中でヴァースニック新聞社は、事業をしたり募金をしたりして集めたお金で土地を買ひ家を建てて、強汚染地に住む人々の中から、小さな子供を持ち、その子供に健康被害が現れ始めている人々にその家を無償で提供するという仕事を始めている。これまでに8戸の家を建て、今5戸を準備中だという。ストレーヴィッチさん一家を訪ね、その一例を見せてもらった。5人の幼い子供を持つご夫婦で、コロスティンという村から移住してきたという。手作りのごちそうで私達を歓迎してくれた夫人は、「この地に来て子供達の甲状腺肥大も治まり、大変喜んでいます。これもみんなヴァースニック新聞社のおかげです。」と語っていた。しかしこの一家は特別に幸運な人で、大多数の人々は今尚強烈な放射線の飛び交う汚染地に住み続けているのだ。

白ロシアのモギリョフ州スラブゴルドという村に、そんな住人の生の声を聴きたいと出かけて行った。ミンスクから260キロの距離をマイクロバスで突っ走る。片道3時間半の日帰り旅行だ。汚染地に住む人々に会いたい一念の強行軍である。本当はスラブゴルドの25キロ先にあるという、平均が40キュリー以上

の汚染地であるクリコフカ村にも行きたかったのだが、時間が足りないという事で目と鼻の先までたどり着きながら、結果的には行く事が出来ず、後ろ髪を引かれる思いで引き返した。それでもミンスクに帰り着いたときにはすでに夜中の0時になっていた。村の平均値が12キュリーというスラブゴルド村。その病院の院長室で職員の人達の声を聴く。ここは政府決定の移住対象地にさえ入らない。しかし確実に汚染はある。事故後何が変わったかとの質問に、暗い表情の女性は答えた。

「自費で移住できる20%の村人はすでにこの村を去った。しかし私達はお金も移住先の家も仕事も無いので、仕方なくこの村で暮らしている。汚染されていない食べ物の配給は無い。店で売っている食料は一応測ってはいるらしいが、非汚染地に比べ格段に高い基準が設けられている。燻でとれるものは総て食べている。しかし検査はしていない。牛乳は飲むなと命令がでているし、森に入る事も禁止されている。この病院の医者は半数が逃げた。お互いの信頼関係が揺らぎ、心が固くなった。未来に全く希望が持てない。人々が働く意欲を失った……。」

又、今何を希望するかとの質問には、「汚染されていない食べ物が食べたい。森に行きたい。湖で泳ぎたい。汚染の無い土地へ早く移住したい」と切実に訴えていた。彼らにとっては森に入りきのこや木の実を採ったり遊んだりする事、又川や湖で泳ぎ魚を獲る事が生活の一部だったのだ。人間として生きていく上での基本要素とも云える、衣食住の生活の中に含まれていると云ってもいい程大切

なことだったのだ。生活の基本となる安全な食べ物と住環境が根本的に奪われてしまったと云っていい。そして生きる喜びをもたらすはずの生産労働と、豊かな心の交流を持つべき人間関係が喜びでなくなり、未来に対する一切の希望が持たなくなったというのだ。この言葉を聞きながら、私は環境が放射能で汚染されるという事は、人間として生きる喜びを根底から総て奪われてしまうという事なのだと思い知らされていた。そして、彼らにとってのごくごく素朴な望みは、おそらくこの先も叶えられる事は無いはずだ。そんな苦痛に満ちた生活の挙げ句、最終的には致命的な病に倒れ、生命をさえ奪われてしまうという恐怖が彼等の心に覆いかぶさっているはずだ。食べ物や水を通して体内に蓄積され続けているセシウムの量は、強汚染地に住む人々の平均で10万ベクレルに達したという話が聞かれたのだから。中には20万ベクレルという量をすでに体内にため込んでいる人もいるという。(白ロシア科学アカデミー原子力研究所長談)日本人の体内にも、チェルノブイリ事故後セシウムの蓄積量が増えているという。しかしその値は、87年のピーク時でさえ60ベクレルということである。これでも大変深刻な数字なのだが、ソ連現地の人達の蓄積量は日本人とは桁違いの信じられないようなベラボウな数値なのだ。

放射線被曝には、外部被曝と内部被曝という2種類があり、身体の外から放射線を浴びる外部被曝に比べ、食べ物や空気と共に取り込んだ放射能から、細胞の至近距離で被曝する内部被曝の方が、生体にとってはより深刻な問題だという事

なのだから。

こうして身体の内から外から放射線を浴び続けている現地の人々の苦痛の日々が、これらの話を聴いただけで十分に察せられる。

このスラブゴールド村の一角に、40.9キュリーと公表された特別に汚染の高い土地があった。いわゆるホットスポットと云われる処である。ここで私の持って行った簡易測定器のデジタルは、0.6ミリレントゲン/hまで記録した。普通の土地の自然放射能が0.01~0.02ミリレントゲン/hと云われているから、平常値の30倍~60倍という高い放射エネルギーである。とても40.9キュリー位の汚染とは思えない。40キュリーでもとてつもなく強い汚染なのだけれど、この土地はおそらくそれ以上だと思われる。



ここで私は、今回の旅で一番胸の痛む思いを味わった。このペラボウな汚染地に人が住んでいたのである。しかも幼い子供達がいたのだ。4世帯の共同住宅が建っていて、そこに19人が住んでいた。その内の8人が小さな子供達だった。一番幼い子供は何と2才の坊やで、その他学童期前からせいぜい小学校低学年位までの幼い子供達なのだ。その子達は自らが置かれている深刻な状況を知る由も無く、無邪気に遊んでいた。知人からこどずかっ行って作った手作りの小さな貝のおもちゃを一人ひとりにあげると、田舎の子らしくはにかみながら、それでも全員が「スパシーバ!!!」と云い、何とも云えず嬉しそうな顔で受け取ってくれた。すでに甲状腺肥大と貧血の症状が出ていると云う。この先、強い放射線の飛び交うこの土地で暮らし、そこの地下水を飲み続け汚染された食べ物を食べ続ける事で、この子達の未来には一体何が待っているのだろうか……。ジトミールの子供総合病院で会わせてもらった重症の白血病の子、3才のミーシャ君の姿がオーバーラップする。原発を選択したことに何の責任も無いこの子達が、まず最初に犠牲になってゆくのだ。そしてこの子達の置かれている境遇は汚染地全域に共通した現実なのだ。子を持つ母の一人として、この子達の未来が思われ胸がしめつけられる。かけがえのない幼い生命を犠牲にしながら、一体誰が何の為に原発を推進し続けるのか……。私にはこんな人間の行為がたまらなく哀しく見える。

たった一つしか無い母なる地球の自然環境を破壊し、幼い生命を犠牲にする原発は何としても許されるべきではない。

科学の力を過信し、自然を征服し得たと錯覚した人間の傲慢さが生んだ原子力発電。例え電気が足りなくても生命が奪われる事は無いが、放射能と生命は決して共存できない。今大切なのは、私達が自然に対する謙虚さを取り戻し、自然環境に生かされているという自覚のもと、エコロジカルな生き方を志向する事だと思う。チェルノブイリの事故は私達にその事を教えてくれている。モスクワ空港に降り立った時驚いた暗さにも、その中で生活に慣れた目には何の違和感も感じなくなっていた。かえって成田空港の異常な明るさが、経済の繁栄に酔いしれている日本人の軽薄さの証明のように思えて、何とも情けなかった。今私達は余りにぜいたくに慣れすぎてはいないだろうか。物の豊かさや便利さを際限なく追い求めていくこのような生き方の先には、地球環境を破壊し尽くし、挙げ句に人類が絶滅する日が間違いなく待っている。



チェルノブイリの事故を通してソ連が身をもって私達に教えてくれている尊い警告を、今私達は謙虚に受け止めなければならぬ。そして1日も早く、唯ひたすら物の豊かさや経済の繁栄ばかりを追い求め、自己の欲望のみを満足させようとあくせくしている私達のあり方を改めていく必要がある。唯一その道だけが地球環境を守り生命の絶滅を回避する道なのだから……。



適 要	金額	摘 要	金額
[収入] 会費(322口)	322,000		
[支出] 郵送費		印刷費	
97/ 7月チラシ送料	19,610	用紙代	17,600
8月通信1号切手代	9,736	インク代	8,885
9月通信2号切手代	18,150	チラシ印刷代	49,042
12月通信3号切手代	22,320	タックシール代	3,069
91/ 1月ハガキ代	12,300	事務費	
2月通信4号	15,290	封筒代	20,620
3月美浜原発事故報告集切手代	10,800	ゴム印代	6,605
4月藤田講演会報告集切手代	11,500	「核の大地」パネル写真代	10,000
5月通信5号・広河隆一報告集切手代	13,640	パネルフレーム代	19,279
6月通信6号切手代	21,824	会議室使用料1(1月)	3,600
ゆうパック代	8,830	会議室使用料2(6月)	4,330
	175,500		154,000
		収入金額	322,000
		支払金額	329,500
		繰越残高(赤)	▲7,500

支援募金 [収入の部] 90年6月18日～91年6月25日

適 要	金額	摘 要	金額
【団体カンパ】順不同・敬称略			
脱原発だるまさんがころんだ	14,032	宝城中学校分会	2,000
ぶろてすと編集部	3,350	御幸小学校分会	1,000
風通信編集部	4,000	弓削小学校分会	1,000
鹿児島(宮路)	62,500	千年小学校分会	1,000
八代(松本)	91,974	ひとくわ農場	2,000
草の根の会	51,000	福岡県教職員組合	150,000
若松協会	7,029	共生社生協八代	53,000
アルピオンアートジャパン	9,000	グリーンコープ北九州地方	2,000
グリーンコープ生協大分(瀬)	15,025	生活協同組合おおいた	511,863
脱原発大分ネットワーク	135,112	グループT・H・あるく	9,000
地球・ファン・クラブ	51,667	大分(河野)	98,737
ムラサキツユクサの会	30,454	唐津(渡辺)	78,592
原発いちぬけた女達の会	4,000	北九州(辻)	32,500
廃炉に向けて行動しよう			
指宿ネットワーク	21,000		3,770,613
脱原発ネットワークさがえもん	6,000		
原発ってなあにの会	20,000		
下関南高等学校	47,000	【個人カンパ】	
原発知っちゃる会	9,600	約334件	1,497,751
つゆくさ会	7,000		
グループイーハトーブ	40,000		
原発いらない!			
チューリップの会	35,000		
水俣わくわく情報センター	87,516		
原発なしでいのちきの会	209,227		
カナリー	10,000		
チェルノブイリ支援運動・福岡	231,588	◇藤沢薬品より寄贈◇	
福岡県南部生協	9,650	藤沢薬品セフспан	
チェルノブイリ支援寄金・宮崎	768,253	セフェナム継生物質カプセル30個	
福岡教育文化研究所	19,000	新チオクタンA300錠(3)	
福田整形外科	35,605	リバヘルス120錠(3)	
石垣小学校・PTA	37,778	胃腸薬グリーン32包(3)	
有機農産物産直センター	2,000	オイラックスデキタ軟膏	(4)
チェルノブイリ救援・えひめ	300,000	◇三共薬品より寄贈◇	
たんぼぼとりで	11,776	ビタミンジカプセル3箱	
南南部婦人会	5,000	新三共胃腸薬2包×100	
福教組粕屋支部	70,000	◇奄美のくろうさぎより	
くまもと生活協同組合	335,049	手作りクッキー	
沖田中学校・生徒会	20,000	◇支援運動よりコーヒー他	
小郡小青年部	5,000		
		募金総合計	5,268,364

[支出の部] 90年6月18日～91年6月25日

適 要	金額	摘 要	金額
(第一次支援物資) 放射能測定器 (5台) 粉ミルク(ｽｷﾞﾐﾙｸ、ﾈｽﾐﾙｸ) 書籍 乾電池 通信費 (FAX代) 支援物資運送料 支援物資輸出通関料 送料 (荷物梱包代)	1030,000 766,640 100,000 2,060 7,250 180,858 6,630 4,274	(医療調査派遣団) 通信費 (国際電話代) (FAX代) 支援物資運送料 北九州～成田空港まで 荷物梱包代 (ダンボール・ ガムテープ等) 雑費 ビデオテープ代 ビデオ用バッテリー ACアダプター	 2,800 25,710 85,902 7,156 10,897 29,664 2,266
小計A	2,145,124	調査団2名分旅費 交通費 (来賓) 東京～福岡航空券代 宿泊代、バス代	700,000 62,000
(医療調査派遣団) [支援物資] ポケット線量計 テルモ:採血管(170本) :採血針(180本) :ホルダー(20個)	30,900 51,500	小計B	2,105,390
粉ミルク(200缶) 放射能測定器(2台) 1台は朝日新聞社の寄付 フクダ心電計(2個) アックス(1台) 感熱ロールペーパー10本付 乾電池(放射能測定器用) (プレゼント用) 土産用お菓子 変圧器	395,108 206,000 206,309 111,652 3,160 4,666 9,700	/	
[移住基金カンパ] ジトミールスキー・ピースニ ック新聞社 チェルノブイリ同盟 (白ロシア)	100,000 60,000	(A+B)	4,250,514
(右欄へ続く)		次期繰越	1,017,850
		合 計	5,268,364

上記のとおりご報告いたします

チェルノブイリ支援運動・九州事務局 会計:安

事故から5年

いまチェルノブイリでは

何が起きてきているのか

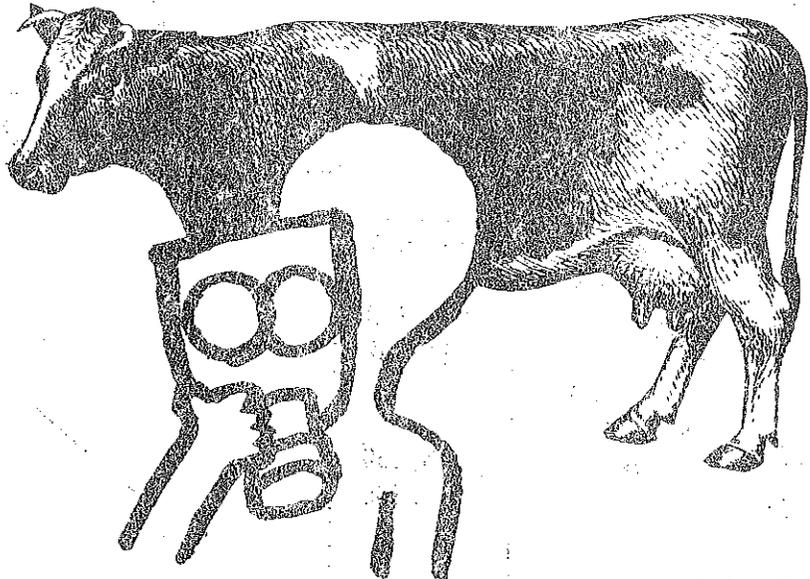
「I.A.E.A (国際原子力機関) は、住民への影響はないと報告書をまとめた。しかし、除染作業にたずさわった約60万人の人たちは調査対象に含まれていない。また、白ロシア、ウクライナ共相国では子供たちを中心に白血病、甲状腺障害が多発していると言われる。ウクライナからジャーナリストの二人を招き現状を語ってもらう」

講師
ヴァレリイ・ネチポレンコ氏(シトミルスキー・ウイニスニツク通信社編集長)
アルチエフ・ライザさん(小児科女医)

◆同時報告
ウクライナ・白ロシア訪問記

深江 守さん(チェルノブイリ支援活動・九州事務所)
今年6月中旬に約10日間、医療援助の可能性をさぐるため白血科専門医とともにウクライナ・白ロシアを所長として訪問。スライドを使って報告。

チェルノブイリ



入場料

高校生.....〇〇〇円
小中生.....五〇〇円
無料
(必要経費を差引き残りは寄金)

'91

8/9

PM 7:00から

宮崎県医師会館



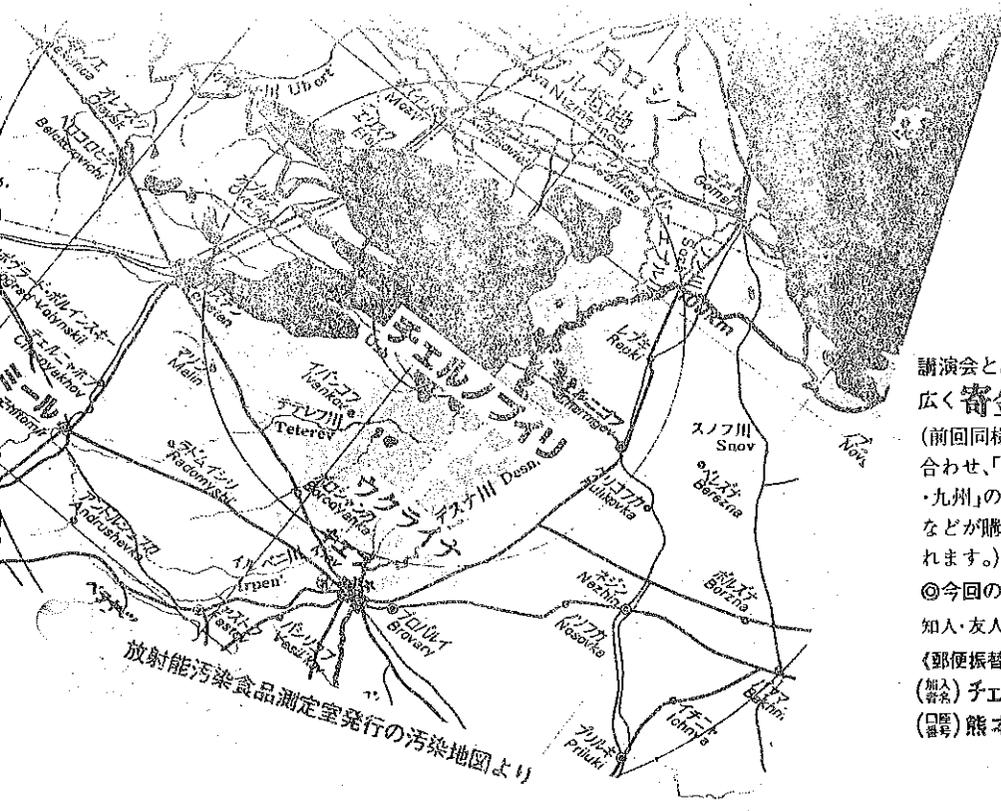
主催 / チェルノブイリ支援寄金・宮崎

(連絡先) 宮崎 ☎ 0985-23-3970 (白土) 高崎 ☎ 0983-23-3212 (松丸)
☎ 0985-25-2413 (山口) 佐土原 ☎ 0985-73-3251 (武村)
☎ 0985-53-8490 (仁高) 日南 ☎ 0967-29-1741 (小室)
延岡 ☎ 0982-33-1459 (法田) 串間 ☎ 0987-76-1532 (松)
日向 ☎ 0982-53-9400 (岩切) 都城 ☎ 0986-39-4646 (藤橋)
☎ 0982-57-1286 (瀧口)

講演会と合わせ 今回が切は91年8月31日です。寄金も募っています。知人・友人など通じてお寄せ下さい。

(郵便振替ご利用の場合)

(加入者名) チェルノブイリ支援寄金・宮崎
(口座番号) 熊本 8-28541



講演会とあわせて、県内の方々に
 広く**寄金を募っています**。
 (前回同様、九州の人たちの分と
 合わせ、「チェルノブイリ支援運動
 ・九州」の手で医療器具・粉ミルク
 などが購入され、被災地に送ら
 れます。)
 ◎今回の締め切りは**8月31日**です。
 知人・友人などを通じてお寄せ下さい。
 (郵便振替ご利用の場合)
 (振込) チェルノブイリ支援寄金・宮崎
 (口座) 熊本 8-28541

世界中に放射能を降らせた、あのソ連チェルノブイリ原発核暴走爆発事故からもう5年が過ぎました。その後、日本でも福島第2原発3号機や美浜原発2号機で大きな事故が起きました。それらは、一歩まちがえば核暴走やメルトダウンに発展し、破局をまねきかねないものでした。「チェルノブイリ。」この名前はスリーマイルやセラフィールド等とともに、決して忘れられるものではありません。

昨年10月に58人の市民によって呼びかけられた「チェルノブイリの子供たち緊急支援のお願い!」には、県内各地からたくさんの寄金が寄せられ、ウクライナ共和国のジトミール州に放射能測定器や粉ミルクなどが届けられました。

その間ジトミール州(キエフのすぐ西に位置し、宮崎県と鹿児島県をあわせた程の大きさ)からは、特に北半分がまるごと汚染にさらされ、困難に直面していることを伝えてきました。農地・山林を問わず汚染されていること。除染がうまくいっていないこと。汚染は均一ではなく、とても高い地域があること。牛乳から深刻な量の放射能が検出されること。動物にも影響が現れていること。子ども・大人を問わず、病人が増えつつあること。医療器具・設備が不足していること。避難しなければならないのに、遅々として進まないこと。援助がなければ、どうしようもないこと。そのような状況の中で、人々が心理的に複雑・不安になっていること等です。

今回、そういう困難に直面しているウクライナから二人の方を迎えます。一人は、民間で移住基金をつくり避難計画を一つ一つ進められているジャーナリストのヴァレリイ・ネチポレンコ氏。もう一人は、子どもたちの健康に携わられている小児科医のアルチュフ・ライサさんです。

二人の方から、事故から5年後に起きていることを語ってもらいます。そして、その講演を通じて何をしたらよいか、何ができるか探していきたいと思います。

多くの方が参加されるよう希望します。

1991年7月

呼びかけ人

- | | | |
|-----------|-----------|-------------|
| 二宮 陸 徳 | 柿 木 佳 子 | 坂 本 一 敏 |
| 坂 本 正 典 | 渡 辺 紀 美 子 | 大 久 保 悦 雄 |
| 芥 川 仁 仁 | 武 村 智 仁 | 和 田 信 利 |
| 清 田 勝 成 | 高 橋 静 江 | 国 務 会 議 分 会 |
| 小 野 敬 子 | 柴 木 正 氣 | 山 口 一 誠 |
| 小 室 美 保 子 | 柳 田 治 妙 | 長 友 利 え 子 |
| 小 本 多 寿 | 岡 岡 妙 子 | 増 田 ト シ 子 |
| 横 井 英 紀 | 山 田 子 ヲ カ | 長 谷 川 拓 史 |
| 藤 嶋 芳 洋 | 原 郎 隆 一 | 橋 智 子 |
| 横 田 漢 一 | 金 丸 樹 一 | 川 原 一 之 |
| 今 西 ミ 子 | 白 土 和 幸 | 小 室 利 之 工 |
| 寺 原 和 子 | 青 成 田 弘 志 | 末 吉 英 明 |
| 谷 口 稔 子 | 松 丸 ま き 子 | 永 山 倫 太 郎 |
| 二 宮 奈 智 代 | 清 口 由 子 | 宮 田 千 鳥 |
| 日 野 原 文 文 | 田 中 初 穂 | 増 田 政 子 |
| 井 野 文 裕 | 永 山 昌 彦 | 大 久 保 ス マ 子 |
| 岩 切 昌 之 | 田 中 聡 司 | 橋 口 弘 道 |

(順不同)

限りある生命の
いとおしごのために

チェルノブイリ展

●私達の家には、大きな不幸が訪れました。最近、私の3才の娘ターニチカが死んだのです。医者は、心不全と血液病と診断しました。彼女は、チェルノブイリの後に生まれました。とても賢い子でいつもおしゃべりをしていました。

「ママ、私、心臓や頭が治ったら、元気になって早く走るわよ」と言っていました。それなのに運命が彼女に残酷に押し寄せました。ターニチカは、死ぬ前に私に言いました、「ママ、私が死んだら、土の中に埋めないでね。」と。母親としての不幸を言葉では表現することができません。これは我が子を持つ母親にしかわからない気持ちでしょう。

イミリチノから アライセイ=イワーノフナ

●私達には7才の娘がいます。娘はしょっちゅう病気をしています。私達の娘だけでなく他の子供達も病気をしています。それに治療する薬がありません。医療品もないし、放射線測定器もありません。

私達は、この地区にすでに4年間住んでいます。これからどうなるかよくわかりませんが、ひとつだけ、時間が経つほど悪化しているということがわかっています。私達大人さえ苦しんでいるのです。子供たちなら尚更でしょう。それを見るのは、非常に心が痛みます。毎日毎日同じことばかり考えています。私たちからチェルノブイリまでの距離は、たった100kmです。けれども私達は、良いことを、そして日出る国の友達との親善を期待しています。

コーラステン市 ダシケーピッチ=ワシイリイ=ブラジーシラビッチ

主催/ピース・デイズ・インさせほ実行委員会

(連絡先 ☎ 0956-31-2782 ; 宮野方)

後援/ ●佐世保市教育委員会

●NHK・NCC・NBC・KTN・NIB

●朝日・毎日・読売・長崎・西日本新聞